

書 評

児玉 和夫・他 著

発達障害児の水泳療法と指導の実際

富田 昌夫 (神奈川県リハビリテーション病院理学療法科)

ややもすると楽しさだけが強調されて治療的側面が軽視されやすい、いや軽視するというよりも治療に結び付ける良い技術がなかったのが幼少児に対する水泳療法である。

本書ではこのような幼少児や重症児にもリハビリテーションの一環として治療が成り立つような水泳の指導法として新しい手技を紹介している。発達学的水泳療法である。従来からの水泳療法としてハリウィック法を紹介し、両者の特徴や適応についても述べている。

本書は5章からなっており、「第1章：水泳療法の理論的背景」では水の物理的特性、水中での生理学的特性と水中運動による一般的治療効果が述べられている。「第2章：水泳療法の指導にあたって」ではプール環境と水泳療法を開始する際の本人、親に対する注意事項を述べ、「第3章：水泳療法の手技」で、ハリウィック法、発達学的水泳療法に関して述べている。水という自分を支え固定してくれる力の乏しい環境では、ボディ・イメージや周囲と自分との関係がかなり明確に認知できていないとパニックになりやすい。ハリウィック法で指導する際、最も苦労するのがこのような患者（幼少児とは限らない）の

水慣れをいかに誘導していくかである。発達学的水泳療法では発達の原理、原則にしたがって姿勢変化の進め方、運動の方向、さらにはリズムや物を使用してこの問題を解決しようと試みている。成人にも利用できる大切な概念である。「第4章：障害別指導の実際」では実例が多くきわめてわかりやすい。ハリウィック法では取り組みにくい、運動機能以外に問題をかかえた精神発達遅滞、小児行動異常、重度・重複障害児に発達学的水泳療法の特徴が明確にでていて非常に興味ももてる。単に治療するだけでなく、水泳指導が対人関係、特に親子の関係改善や療育として生活の一部として生かされて、始めてその効果を発揮するなど、子供のQOLを大切に考えた考え方が強調されている。「第5章：障害児水泳療法の医療的諸問題」では水泳がもたらす利点と問題点や問題となりやすい疾患について述べている。

水泳を治療に取り入れるための一般的事項、手技、問題点全般に関して述べられており、処方する医師、実際に指導する療法士やトレーナーいづれにとっても具体的でわかりやすく、ぜひ一読を勧めたい良書である。

(B5版 178頁 4,200円(税込) 1992 医歯薬出版刊)